

## 推薦入学選考Ⅱ期 国語「基礎学力調査」

【一】 次の文章を読んで、後の問い（問一～問十二）に答えなさい。

C

明治初期の日本において、アメリカがより深い観念として受容されていたのは、キリスト教宣教師や教師の活動を通じてであった。当時、来日した宣教師の多くはアメリカ人で、大学南校で教頭を務めたフルベッキ、熊本洋学校のジェーンズ、札幌農学校のウィリアム・S・クラーク、さらに横浜のブラウン塾やヘボン塾（明治学院）、キダー女史の女学校（フェリス女学院）などから新島襄の同志社まで、アメリカのキリスト教は明治の教育界へ多大な影響を与えていった。

I

とりわけ札幌農学校でメソジスト教会の熱烈な信徒でもあったクラークから教えを受け、やがて自らもメソジスト教会で洗礼も受けた内村鑑三にとって、アメリカは「自由の聖地」として理念化された存在となっていた。しかし一八八四年、この「聖地」であるはずのアメリカに渡った内村は、世紀末のアメリカで横行する「金<sup>(1)</sup>びか主義」の生々しい現実に直面し、ギャップに悩みながら、アメリカの理念をより内的な次元に深めていく。こうした内村の両義的なスタンスは、一八九五年に英語版が出され、やがてヨーロッパ各国語に訳されて名声を博した『余は如何にして基督信徒となりし乎』に明白である。

II

同書において、「すべて高貴なもの、有用なもの、向上的なものを英語という運搬車を通して学んだ」主人公は、「異教文

明にまさる基督教文明の優越性」を信じ、「聖地」として心に描いたアメリカに渡る。しかし渡米後、この「高けつ」なアメリカのイメージは、徐々にだが A。主人公の米国での経験の数々は、「金銭はアメリカでは全能」であることを彼に思い知らせた。しかも、「人民の間に依然として存在している強い人種的偏見」によつて、この国は彼の目にまるで異教国のように見え始める。アメリカ人の感情は、「インディアン人とアフリカ人に対して強れつで非基督教的」であり、「シナの子らに対して彼らがいだく偏見・けん悪・反感は我々異教国のものがかつて類例を見たことのない」ほど傲慢な差別意識に満ちていた。内村は、これら金びか主義と人種差別を筆頭に、賭博傾向や拳闘への熱狂、大規模なラム酒取引、政治的デマゴギー、資本家の圧制、貧富の格差などのアメリカの矛盾を次々に批判していく。結局、世紀末のアメリカに存在したのは、キリスト教的な高けつさどころか、複雑な社会と混乱、狂気と刑務所、膨大な貧困層であった。

### III

<sup>(2)</sup> 理念として受容されたアメリカ像と実際のアメリカ社会との著しいギャップのなかで苦悩する内村の態度は、明治中期以降の多くの知識人のアメリカ受容に通底する。明治初期のキリスト教知識人にとって、アメリカはまず「自由」の理念が具現された「聖地」として受けとめられた。しかし、やがてこうしたユートピア的なアメリカ像は、実際の経験によつて徐々に裏切られていく。そこで見えてくるのは、競争原理が幅を利かせ、腐敗や貧困、人種的偏見が充満した病める国家の姿である。二つのアメリカは、矛盾し、乖離し、しばしば衝突する。内村の場合、後者の欺瞞的なアメリカを激しく非難しつつ、前者のアメリカをより抽象的な次元で内面化し、最終的には無教会主義の立場をとるに至る。しかし同様のアメリカ像の分裂は、明治中期以降、アメリカに渡つていく文学者や芸術家たちにも受け継がれていくのである。

### IV

D

明治末、アメリカへの分裂した意識を自覚的に捉えた代表的な文学を挙げるなら、永井荷風と有島武郎になる。荷風は初期の『あめりか物語』（二九〇八年）で、有島は、「或る女のグリンプス」（一九一一年）から代表作『或る女』（一九一九

年)に至る著述を通じて、「アメリカ」に対する日本人の意識の屈折に鋭いまなざしを向けていった。

## V

一方で荷風は、二〇代後半の四年間をアメリカで過ごすなかで、独特の斜に構えた文学的スタイルを確立しながら、アメリカ社会の両面性、日本から渡った人々の困難や絶望を冷静なタッチで描いていった。彼は、地方大学でキリスト教に身を捧げる日本人の若者や、たとえ「偽善的」であったとしても、日本の家父長制に比べればはるかに女性たちが人生を楽しんでいること、そして「自由の国には愛の福音より外には、人間自然の情に悖った面倒な教義は存在して居ない」ことを語っていく。他方、「米国ほど道徳の腐敗した社会はない」という作中人物の科白や移民の悲惨な運命、抜け目なく売春斡旋で生き延びる日本人、人種差別の数々を通じてアメリカの「暗黒面」を浮かび上がらせたのである。この作品は、日露戦争後のいわゆる「自然主義」勃興のムードとも合致し、荷風を「やく文学界のスター」にしていった。

## VI

しかしながら、明治末の作家たちのなかで、おそらくは誰よりも「アメリカ」を深く内面化してその文学世界をかたちづかったのは有島武郎であった。彼の『或る女』では、偽善的なキリスト教徒であった母の強い影響を受けて育ち、「世間の常識」に公然と反旗を翻してきた主人公が、再婚相手のいるアメリカをめざして渡航しながら、結局は上陸せずに帰国してしまう。彼女は船のなかでアメリカについて、「女のチャームというものが、習慣的な絆から解き放されて、その力だけに働くことのできる生活がそこにはあるに違いない。才能と力量さえあれば女でも男の手を借りずに自分を周りの人に認めさせることのできる生活がそこにはあるに違いない。女でも胸を張って存分呼吸のできる生活がそこにはあるに違いない」と想像する。そして一度はそうした「米国で、女としての自分がどんな位置にすわることができるか試してみよう」と決意するのだが、結局、遅しい肉体をもつ船の事務長に惹かれ、恋に落ち、日本に舞い戻ってきてしまう。この帰還はやがて、彼女に悲惨な結末をもたらしていくことになるのである。

## VII

有島はこの作品で、明治の日本で「時代の不思議な目覚めを経験した」主人公にとって、恐ろしい敵は男たちだったと書く。男たちは「女がじっとしている間は慇懃にしてみせるが、女が少しでも自分で立ち上がろうとすると、打って変わって恐ろしい暴王になり上がる」。

B

日本に対し、アメリカは、そうした抑圧体制の外にあるはずの空間<sup>(5)</sup>だった。しかしながら、物語の主人公は、そのアメリカに達しない。主人公がアメリカに達することができないのは、彼女の自己の根本的な不安定、どこにも自分の身の置きどころがないという存在感覚から自らを解き放つことがないからである。いうまでもなく、この女主人公には有島自身が投影されている。有島もまた、打ち倒すことのできない家父長権力の前で怯え、自己の根本的な不安を抱え続けて情死するという最<sup>(\*)</sup>を遂げた人であった。

(吉見俊哉『親米と反米』による)

〔問一〕 二重傍線部(ア)～(オ)に必要な漢字を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(ア)	高 <u>け</u> つ	①	傑	②	決	③	欠	④	斐	⑤	潔
(イ)	強 <u>れ</u> つ	①	烈	②	例	③	浙	④	滅	⑤	拉
(ウ)	け <u>ん</u> 悪	①	廉	②	娟	③	嚴	④	嫌	⑤	遍
(エ)	一 <u>やく</u>	①	約	②	躍	③	役	④	翼	⑤	訳
(オ)	最 <u>ご</u>	①	誤	②	故	③	期	④	健	⑤	後

〔問二〕 傍線部(1)「内村の両義的なスタンス」とはどのようなことか。次の①～⑤の中から、最も適切なもの一つを選びなさい。

- ① キリスト教と国粹主義への憧憬
- ② キリスト教と明治の教育界との対峙
- ③ メソジスト教会のクラークの教えと洗礼の間
- ④ 「自由の聖地」と「金ぴか主義」への立ち位置
- ⑤ アメリカのキリスト教と明治の教育界への反駁

〔問三〕 空欄 

A
---

 に入る言葉として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① 根底から崩壊していった
- ② 諦めへと変遷していった
- ③ 内村の心をとらえていった
- ④ なお一層の確信へと結びついていった
- ⑤ 内村の心酔するところとなっていた

〔問四〕 傍線部(2)「理念として受容されたアメリカ像」とは、どのようなものであったか。次の①～⑤の中から、最も適

切なものを一つ選びなさい。

- ① 貧困に喘ぎ、病める国
- ② 異教文明を受け入れる寛容な国
- ③ キリスト教の愛に満ちた崇高な国
- ④ 文化の汚点を覆い尽くす精神を有した国
- ⑤ 資本主義と自由に象徴される満たされた国

〔問五〕 傍線部(3)「アメリカ社会の両面性」と合致しないものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① 偏見と差別
- ② 聖地と金銭
- ③ 福音と暗黒
- ④ キリスト教に身を役じる若者と売春斡旋で生き延びる日本人
- ⑤ 内村鑑三が聖地として心に描いた国と異教国のように映った国

〔問六〕 傍線部(4)「その」が指すものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① 反旗
- ② 再婚相手
- ③ アメリカ
- ④ 習慣的な絆
- ⑤ 女のチャーム

〔問七〕

空欄

B

に入る言葉として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① 徒弟制度が隆盛を極めている
- ② 女性蔑視が薄れかかっている
- ③ 抑圧的な男性支配原理が貫徹する
- ④ 戦時体制下で国民たちが抑圧される
- ⑤ 支配する側とされる側とが強く向き合う

〔問八〕 傍線部(5)「抑圧体制の外にあるはずの空間」が指すものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① 男性優位社会
- ② 女性を祭り上げる社会
- ③ 異教徒の信仰を排除する社会
- ④ キリスト教精神に則った男女平等の社会
- ⑤ キリストの名のもとに社会格差を助長する社会

〔問九〕

空欄 C と

D

には、それぞれ小見出しが書かれていた。その小見出しとして最も適切なものを、次の①～⑥の中から一つずつ選びなさい。

- ① アメリカの愛と自由
- ② 明治を生き抜いた宣教師たち
- ③ 女たちと愛と自由の国アメリカ
- ④ キリスト教とアメリカの「自由」
- ⑤ 明治の文豪たちと私たちの日本
- ⑥ 永井荷風と有島武郎のアメリカ体験

〔問十〕

本文の中から次の文章が抜き取られている。この文章があった場所として最も適切なものを、後の①～⑦の中から一つ選びなさい。

実際、宗教的アメリカニズムの影響は、幕末に米国のキリスト教コミュニティで生活し、やがて明治国家の教育体制の基礎を築いた森有礼から、札幌農学校でクラークの影響下にキリスト教に入信し、渡米していく内村鑑三、新渡戸稲造などにまで貫かれている。

- ① Iの切れ目
- ② IIの切れ目
- ③ IIIの切れ目
- ④ IVの切れ目
- ⑤ Vの切れ目
- ⑥ VIの切れ目
- ⑦ VIIの切れ目



〔問十二〕 次の①～⑤の中から、本文の内容と合わないもの一つを選びなさい。

- ① 内村鑑三は、アメリカの正と負の部分に悩みながらも、それらを内面的に両義的スタンスで捉えた。
- ② アメリカでの人種差別を目の当たりにした内村鑑三には、アメリカがキリスト教国以外の異教国のように映った。
- ③ 内村鑑三が世に知らしめたアメリカ像の分裂は、以降、日本の文学者や芸術家たちの渡米を阻んだ。
- ④ 永井荷風の『あめりか物語』は、アメリカの腐敗した側面を世に提示したが、同書は、日露戦争に続く「自然主義」台頭と相まって世間から認められた。
- ⑤ 有島武郎の『或る女』に登場する主人公が体験したことは、有島自身が抱いていた日本の家父長制度への怯えが投影されていた。

【二】 次の文章を読み、後の問い（問一～問十三）に答えなさい。（本文中の\*印は「注釈」を意味する。）

ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかにだれもない。ただ、ところどころ丹塗りのまゐりのはげた、大きな円柱に、きりぎりすが一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかに、雨やみをする市女笠やちめがさ、ちもみえ、ぼし、ぼうし、帽子が、もう二、三人はありそうなものである。それが、この男のほかにだれもない。

なぜかという、この二、三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉(a)とかいう災いが続いて起こった。そこで洛中のさびれ方はひととおりではない。旧記によると、仏像や仏具を打ち砕いて、その丹が付いたり、金銀の箔が付いたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料しろに売っていたということである。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、もとよりだれも捨てて顧みる者がなかった。するとその荒れ果てたのをよいことにして、狐狸が棲む、盗人が棲む。とうとうしまいに、引き取り手のない死人を、この門に持ってきて、捨てていくという習慣さえ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、だれでも気味を悪がって、この門の近所へは足踏みをしないことになってしまったのである。

そのかわりまた、からすがどこからか、たくさん集まってきた。昼間見ると、そのからすが、何羽となく輪を描いて、高い鴟尾しびの周りを鳴きながら、飛び回っている。ことに門の上の空が、夕焼けで赤くなる時には、それがごまをまいたように、はつきり見えた。からすは、もちろん、門の上にある死人の肉を、ついでに來るのである。——もつとも今日は、刻限(b)が遅いせい、一羽も見えない。ただ、ところどころ、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草の生えた石段の上に、からすの糞が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺あおの襖あおの尻しりを据えて、右の頬に出来た、大きなきびを気にしながら、(2) ぼんやり、雨の降るのを眺めていた。

作者はさつき、「下人が雨やみを待っていた。」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようという当てはない。普段なら、もちろん、主人の家へ帰るべきはずである。ところがその主人からは、四、五日前に暇を出された。前にも書

いたように、当時京都の町はひととおりにならず衰微して(3)いた。今この下人が、長年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波に(4)ほかならない。だから、「下人が雨やみを待っていた。」というよりも「雨に降り込められた下人が、行き所がなくて、E」というほうが、適当である。その上、今日の空模様も少なからず、この平安朝の(4)下人の Sentimentalisme に影響した。申の刻下がりから降りだした雨は、いまだに上がる気色がない。(d)そこで、下人は、

何をおいてもさしあたり明日の暮らしをどうにかしようとして——いわばどうにもならないことを、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さつきから朱雀大路に降る雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門を包んで、遠くから、ざあつという音を集めてくる。夕闇はしだいに空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜めに突き出した薨の先に、重たく薄暗い雲を支えている。

どうにもならないことを、どうにかするためには、手段を選んでい(5)いとまはない。選んでい(5)れば、築土の下か、道端の上の上で、飢え死にをするばかりである。そうして、この門の上へ持ってきて、犬のように捨てられてしま(5)うばかりである。選ばないとすれば——下人の考えは、何度も同じ道を低回したあげくに、やっとこの局所へ(6)逢着した。しかしこの「すれば」は、いつまでたつても、結局「すれば」であった。下人は、手段を選ばないということを肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来たるべき「盗人になるよりほかにしかたがない。」ということ(6)を、Fだけの、勇気が出ずにいたのである。

下人は、大きくさめをして、それから、大儀(6)そうに立ち上がった。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇とともに遠慮なく、吹き抜ける。丹塗りの柱にとまっていたきりぎりすも、もうどこかへ行ってしまった。

下人は、首を締めながら、山吹の汗衫(6)に重ねた、紺の襖の肩を高くして、門の周りを見回した。雨風の憂えない、人目にかかるおそれのない、ひと晩楽に寝られそうな所があれば、そこでもかくも、夜を明かそうと思(6)ったからである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗ったはしが目についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ば

かりである。下人はそこで、腰に下げた聖柄\*せいけいの太刀が鞘走\*さやほしらないように気をつけながら、わら草履を履いた足を、そのはしごの一番下の段へ踏みかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広いはしごの中段に、一人の男が、猫のように身を縮めて、息を殺しながら、上のようなすをうかがっていた。楼の上から差す火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短いひげの中に、赤くうみを持ったにきびのある頬である。下人は、初めから、この上にいる者は、死人ばかりだとたかをくくっていた。それが、はしごを二、三段上ってみると、上ではだれか火をとぼして、しかもその火をそこここと、動かしているらしい。これは、その濁った、黄色い光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、揺れながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。

下人は、やもりのように足音を盗んで、やっと急なはしごを、一番上の段まではうようにして上りつめた。そうして体ができるだけ、平らにしながら、首をできるだけ、前へ出して、おそるおそる、楼の内をのぞいてみた。

見ると、楼の内には、うわさに聞いたとおり、いくつかの死骸が、無造作に捨ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数はいくつともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるということである。もちろん、中には女も男も混じっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、<sup>8)</sup>かつて、生きていた人間だという事実さえ疑われるほど、土をこねて造った人形のように、口を開いたり手を伸ばしたりして、ごろごろ床の上に転がっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなってある部分に、ほんやりした火の光を受けて、低くなっている部分の影をいっそう暗くしながら、永久におしのごとく黙っていた。

(芥川龍之介『羅生門』による)

- \*丹塗り || 赤色の顔料で塗ったもの。
- \*市女笠 || もとは市女（市で商う女）が用いた漆塗りのすげ笠。ここでは、それをかぶった女のこと。
- \*揉烏帽子 || 漆を薄く塗り、もんで柔らかくした烏帽子。ここでは、それをかぶった男のこと。
- \*鴟尾 || 宮殿・仏殿など、大建築の棟の両端に取り付ける魚の尾の形をした飾り。
- \*襖 || 袷あはせ（裏地付きの衣）または綿入れの衣。
- \* Sentimentalisme || フランス語。感傷的な気分。
- \*築土 || 泥をつき固めて作った土手のような塀で、屋根をかわらでふいてあるもの。
- \*山吹の汗衫 || 山吹色をした単の下着。
- \*聖柄の太刀 || 鮫皮を巻かない、木地のままの柄のついた刀。
- \*鞘走らない || 刀身が鞘から自然に抜け出ない。

〔問一〕 二重傍線部(a)～(e)のここでの読み方と同じ読み方をする漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中から、それぞれ一つずつ選びなさい。

(a)	飢饉	①	懷疑	②	疑義	③	吟味	④	真偽	⑤	邪氣
(b)	刻限	①	至極	②	慟哭	③	豪遊	④	行脚	⑤	拘留
(c)	余波	①	霸權	②	伝播	③	罵声	④	新派	⑤	熱波
(d)	気色	①	囑託	②	邪推	③	敷布	④	質疑	⑤	侮辱
(e)	大儀	①	内裏	②	太夫	③	掲題	④	大言	⑤	総代

〔問二〕 傍線部(1)「ところどころ丹塗りのはげた、大きな円柱に、きりぎりすが一匹とまっている」とは、羅生門のどのよ

うな様子を描写したのか。次の①～⑤の中から、最も適切なものを一つ選びなさい。

- ① 隆盛を極めた様子
- ② 退廃して侘しい様子
- ③ 唯々諾々とした様子
- ④ 日本の都として荘厳さを保つ様子
- ⑤ 重厚感と歴史の深さを兼ね合わせた様子

〔問三〕 傍線部(2)「ぼんやり、雨の降るのを眺めていた」下人の様子として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① 都の衰退を憂いている。
- ② なす術も無く呆然としている。
- ③ 人間のいない恐怖感に怯えている。
- ④ いわれの無い孤独感に苛まれている。
- ⑤ 明日は事が好転するだろうと期待している。

〔問四〕 傍線部(3)「ひととおりならず衰微していた」の意味として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① 食料や水が枯渇していた。
- ② 表現し難い絶望感が漂っていた。
- ③ 人々の心が時代の流れに翻弄されていた。
- ④ 人、物、文化において尋常でないほど廃れていた。
- ⑤ 栄華を極めていた武官たちが下野し、かつての誇りが失われていた。

〔問五〕 空欄 E に入る言葉として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① 苦しみに喘いだ。
- ② 途方に暮れていた。
- ③ 故郷を懐かしんだ。
- ④ 我が身に異変を来した。
- ⑤ 止めどなく涙が溢れた。

〔問六〕 傍線部(4)「下人の Sentimentalisme に影響した」とあるが、どのようなことが起こったのか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① 嫌悪感に苛まれた。
- ② 自己憐憫を諦めた。
- ③ 望郷の念に駆られた。
- ④ 京の町を不憫に思った。
- ⑤ ここに至るまでの感傷を助長した。

〔問七〕 傍線部(5)「手段を選んでいるとまはない」のはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① 盗人になる道が残されるから。
- ② 手段を選べば嘲笑的になるから。
- ③ 人の目を気にする余裕があるから。
- ④ 死ぬこと以外に選択肢がないから。
- ⑤ 現実を直視することが許されないから。



〔問八〕 傍線部(6)「『すれば』のかたをつける」の意味として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① 楼に上る。
- ② 盗人になる決心をする。
- ③ 主人のもとへ舞い戻る。
- ④ 楼に入って食べ物をあさる。
- ⑤ 上にいるであろう男と対峙する。

〔問九〕

空欄

F

に入る言葉として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① 念ずる
- ② 打ち消す
- ③ 心の中で詫げる
- ④ 積極的に肯定する
- ⑤ えいやつと思いとどまる

〔問十〕

傍線部(7)「二人の男」が指すものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① 下人本人
- ② 楼の上の誰か
- ③ 火を動かしている者
- ④ ただ者ではない輩
- ⑤ 火をとぼしている人間

〔問十二〕 傍線部(8)「かつて、生きていた人間だという事実さえ疑われる」とあるが、それはなぜか。その理由として最も

適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① 死体は土をこねて造った人形だったから。
- ② 死体が永久におしのごとく黙っていたから。
- ③ 裸の死骸と着物を着た死骸が混じっていたから。
- ④ 男が手に持つ灯が照らし出す範囲が狭かったから。
- ⑤ 床にごろごろ転がる死体が、生命のない人形のようなようだったから。

〔問十二〕

次の①～⑤の中で、本文の内容と合わないものを一つ選びなさい。

- ① 当時の洛中では、天災や人災、飢饉のせいで町中が寂れていた。
- ② 町の経済が衰微していたせいで、この下人も主人から解雇されていた。
- ③ 下人は、雨がやむのを待ったが、やんだからと言ってアイデアがあったわけではない。
- ④ 下人が羅生門の周りを見回したのは、そこで雨に濡れず人に会うことなく夜を明かそうと思ったからだ。
- ⑤ 下人が楼の中へ入ってそこで見たものは、いくつもの死体と灯をかざして何かをしている一人の男の姿だった。

〔問十三〕 次の①～⑦の中から、芥川龍之介の作品でないものを一つ選びなさい。

- |   |       |   |        |   |      |
|---|-------|---|--------|---|------|
| ① | 『蜜柑』  | ② | 『鼻』    | ③ | 『芋粥』 |
| ④ | 『杜子春』 | ⑤ | 『蜘蛛の糸』 | ⑥ | 『雪国』 |
| ⑦ | 『河童』  |   |        |   |      |

# 【解答例】

入試年度 : 2019  
入試種別 : 推薦入学選考  
Ⅱ期  
科目 : 国語

問No.	解答番号
1	5
2	1
3	4
4	2
5	3
6	4
7	1
8	3
9	1
10	5
11	3
12	4
13	4
14	6
15	1
16	3
17	5
18	2
19	1
20	3
21	4
22	2
23	2
24	4
25	2

問No.	解答番号
26	5
27	4
28	2
29	4
30	1
31	5
32	5
33	6
34	—
35	—
36	—
37	—
38	—
39	—
40	—
41	—
42	—
43	—
44	—
45	—
46	—
47	—
48	—
49	—
50	—